

# すすむし

倉敷昆虫同好会発行  
倉敷市岡山大学大原農業生物研究所内  
(連絡事務所 倉敷市幸町倉敷昆虫館内)

## 岡山県の蛾 (3)

### - ヤママユガ科 Saturniidae -

#### 楨本精二

大型の蛾で、国外では世界最大の蛾といわれるヨナクニサンもこの科に含まれている。大きな面積の前後翅と、丸く太った胸部・腹部を有し、夜間灯火を指し巨翅をはばたかせてワサワサと飛しようする様は壮観である。私は備中広瀬に採集に行ったとき、見事な杉林を背景に大空高く飛びたつて行ったオナガミズアオの見事な飛しようぶりに、捕虫網を振るのを忘れて見とれた経験がある。

ヤママユガ科は古来より、その繭より糸を取り布を織ったり、テグスを作ったりして、人類の生活と密接な関係を有し、国外より輸入飼育せられたりしている。

我国では 11 種・5 亜種を産し、最近奄美大島から南方系のハグルマヤママユが井上寛によって採集<sup>(1)</sup>され、新しく日本のファウナに加えられんとしている。

岡山県には 8 種を産することが過去の記録<sup>(2)(3)</sup>により判明しており、我が倉敷昆虫館では 5 種が陳列されておりその目録はつぎのとおりである。

1. ウスタビガ  
*Rhodinia fugax fugax* Butler  
XI・4・1962 高梁市巨瀬 脇本浩  
1♂, 1♀
2. ヤママユ  
*Antheraea yamaï* Guerin-Meneville  
X・2・1961 倉敷市連島 近藤光宏  
1♂, 1♀
3. ヒメヤママユ  
*Caligula boisduvalii jonasii* Butler  
X・30・1962 高梁市高梁 脇本浩  
XI・4・1962 高梁市巨瀬
4. クスサン

*Dictyoploca japonica* Moore  
K・26・1963 玉島市玉島 楨本精二

#### 5. オナガミズアオ

*Actias selena gnora* Butler  
VIII・7・1961 倉敷市幸町 T.Yoshida  
V・4・1963 高梁市広七 小野 洋  
VIII・29・1963 玉島市玉島 楨本精二

倉敷昆虫館未展示品で岡山県に産する記録のあるものは

#### 6. シンジュサン

*Phiosania cynthia pryori* Butler  
真庭郡勝山町<sup>(2)</sup> 英田郡西粟倉村<sup>(2)</sup> 久米郡 塚和村 二上山<sup>(3)</sup>  
VI・21・1959 都窪郡福田村<sup>(4)</sup>  
の記録があり、6月及び8月ころ県内各地に産するものと認められる。  
食草については古市景一の報文<sup>(5)</sup>がある。

#### 7. エゾヨツメ

*Aglia tau japonica* Ieech  
英田郡江見町<sup>(3)</sup>  
V・9・1964 新見市草間 筆者目撃  
の記録が示すとおり、4月-5月中旬に発生し、県内では中部以北の山地に産するものと認められる。発生時期と採集活動時期が一致しないので採集例が少ないが、会員岡本忠の通報によると、高梁市内では発生時期には可成りの数の成虫を目撃したとのことである。

#### 8. オオミズアオ

*Actias artemis artemis* Bremer et Grey  
真庭郡勝山町<sup>(2)</sup> 新見市草間<sup>(2)</sup> 津山市<sup>(3)</sup> 津山市黒沢山<sup>(6)</sup>  
の記録があり、県北部ではオナガミズアオと同

時に採集されている。現在迄の倉敷昆虫館の展示品は鳥取県大山産のみで、県南部での記録は今のところ発見されていない。

オナガミズアオとオオミズアオは1956年頃迄は分離されておらず、全部オオミズアオとなっていたので、古い記録については再検討を必要とする。

オナガミズアオとの外観による区別点については北隆館(1959)原色昆虫大図鑑I:95-2 オオミズアオの項を参考とされたい。

県内未記録種については

9. ヒマサン〔エリサンともいう〕

*Philosamia cynthia ricini* Donovan

保育社(1958)原色蛾類図鑑(下)125

図版2621に図示されている。絹糸虫として輸入飼育されているもので、県内では飼育していることを聞かない。

10. クロウスタビガ

*Rhodinia jankauskii* Oberthur

中部地方以東の各県に採集されているが、産地が限られ、採集事例も少ない。近畿以西の記録は大阪府箕面<sup>(7)</sup> 広島県北部<sup>(8)</sup>があり、福井県、京都府北部、兵庫県北部山地、岡山県北部県境山地、広島県北部山地の分布線も予想されるが、採集見込はない。

11. サクサン

*Antheraea pernyi* Guerin-Meneville

保育社(1958)原色蛾類図鑑(下)126

図版2622に図示されている。絹糸虫として明治時代に輸入され、現在ではヤマユと共に長野県の一部で飼育<sup>(9)</sup>されているだけで、岡山県地方には産しない。

以上で岡山県産ヤマユが科の概略について申し上げたが、蛾についての知見が著しく不足しており、今後の岡山県の蛾の執筆に多大の困難を感じているので、どんなに小さなデータでもよからどしどし「すずむし」誌上に投稿されるか、筆者宛御教示願います。

引用文献

- (1) 蛾類通信(34):266, 第40回蛾類談話会記録, 1964.
- (2) 岡山県:岡山県内生物目録, 1930
- (3) 片山豊八:美作産蝶蛾目録.岡山と昆虫, 1959.
- (4) 榎本精二:都窪郡福田村産蛾類目録.すずむし, 11(1):1-3, 1960.
- (5) 古市景一:シンジュサン楠の木を食す.すずむし, 3(8):109, 1953.
- (6) 片山豊八:黒沢山蛾類一覽(第一報).美作の自然, (6):7-13, 1960.
- (7) 保育社(1958):原色蛾類図鑑(下):227.
- (8) 中村慎吾:広島県北部山地の蛾類(第一報).比和科学博物館研究報告, 4:9-19, 1961.
- (9) 北隆館(1959):原色昆虫大図鑑I:93.
- (10) 山崎寿:信州の有用昆虫-天蚕と作蚕.新昆虫, 9(7):35-38, 1956.

方谷・井倉間蛾類採集品目録

榎本精二

日時 V.9.1964 晴天 昼間  
コース 方谷駅-井倉駅-526.1m三角点-宮原-松二子-井倉駅

記載例については備中広類蛾類採集品目録(1)を参考されたい。

1. ギンボシリンガ	90 - 12	10. ○ウスキシヤチホコ ♀	112 - 2b
2. ○ウスシロフコヤガ	91 - 1	11. ヤマトカギバ	122 - 9
3. フタホシコヤガ	91 - 30	12. ウスキヒメアオシヤク	126 - 22
4. タイワンキシタアツバ	104 - 29	13. ○ヤスジマルバヒメシヤク	129 - 2
5. ○キイロアツバ	106 - 4	14. ○オオハガタナミシヤク	136 - 5
6. クロスジアツバ	106 - 10	15. ○ツマキエダシヤク	143 - 5
7. ○トビスジアツバ	106 - 12	16. フタテンオエダシヤク	143 - 7
8. シラナミアツバ	106 - 15	17. ミスジツマキリエダシヤク	158 - 8
あまり多くない。		18. ○フタマエホシエダシヤク	160 - 8
9. ミスジアツバ	106 - 22	19. ウラベニエダシヤク	160 - 13
		20. キンモンガ	162 - 3
		21. ○クロスジノメイガ	170 - 15
		22. ホシオビノメイガ	172 - 12
		23. ○マエベニノメイガ	172 - 14

## 県下で採集した蛾

## 赤 枝 一 弘

県下で私が採集し、標本が手本に残っている種について報告しておく(その後標本の半数程度は昆虫館の方へ入れた)いずれも普通種であるので特に学名はつけない。

## ○コウモリガ科

コウモリガ 61.9.阿哲郡大佐町布瀬

## ○メイガ科

ツゲノメイガ 55.6.10. 西大寺市西大寺

モモノメイガ 55.6.22. 西大寺市西大寺

## ○マダラガ科

ホタルガ 55.8.31 岡山市竜の口山

## ○フタオガ科

キンモンガ 58.8.31 阿哲郡井倉～方谷

## ○シヤクガ科

## (アオシヤク)

クロスジアオシヤク 60.7.3 阿哲郡大佐町布瀬

ヒメシヤク

ベニスジヒメシヤク 58.6.17 西大寺市西大寺

ウンモンオオシロヒメシヤク 60.6.20. 阿哲郡大佐町布瀬

阿哲郡大佐町布瀬

## (ナミシヤク)

キマダラオオナミシヤク 58.6.14. 高梁市玉川

ナミガタシロナミシヤク 58.6.14. 岡山市 金申山

岡山市 金申山

ピロードナミシヤク

岡山市竜の口山

## (エダシヤク)

ユウマダラエダシヤク 53.9.13. 西大寺市西大寺

西大寺市西大寺

トンボエダシヤク 58.6.14 岡山市金申山

ウメエダシヤク 60.7.3 阿哲郡大佐町布瀬

ヒヨウモンエダシヤク 60.6.20. 阿哲郡大佐町布瀬

阿哲郡大佐町布瀬

キシタエダシヤク 60.6.18. 阿哲郡大佐町布瀬

58.6.8. 浅口郡遥照山

オオゴマダラエダシヤク 60.6.21. 阿哲郡大佐町布瀬

阿哲郡大佐町布瀬

キマダラツバメエダシヤク

54.9.24. 岡山市竜の口山

59.8.24. "

オオバナミガタエダシヤク

60.6.20. 阿哲郡大佐町布瀬

## キエダシヤク

59.6.14. 岡山市竜の口山

## マエキトビエダシヤク

60.5. 阿哲郡大佐町布瀬

## シロツバメエダシヤク

59.7.5. 高梁市玉川

## ウスキツバメエダシヤク

58.6.8. 浅口郡遥照山

## コガタツバメエダシヤク

60.6.20. 阿哲郡大佐町布瀬

## カレハガ科

クヌギカレハ 57.10.24. 西大寺市河本

マツカレハ ? 西大寺市西大寺

## オビガ科

オビガ 60.9. 阿哲郡大佐町布瀬

## ドクガ科

マイマイガ 60.8.13. 阿哲郡大佐町大井野

ニワトコドクガ 54.5.24. 岡山市竜の口山

## シヤチホコガ科

モンクロギンシヤチホコ

60.7.3. 阿哲郡大佐町布瀬

モンクロシヤチホコ

55.8.9. 和氣郡周匝

ホソバシヤチホコ

60.6.20. 阿哲郡大佐町布瀬

## ヤガ科

ゴマケンモン

60.7.3. 阿哲郡大佐町布瀬

シロスジアオヨトウ

? 岡山大学

キクキンウワバ

54.6.20. 西大寺市西大寺

ノコメセダカヨトウ

60.7.3. 阿哲郡大佐町布瀬

フクラスズメ

61.10.29. 阿哲郡大佐町布瀬

キバラケンモン

60.10.9 "

アケビコノハ

61.8.20. "

オオトモエ

61.6.4. "

トモエガ  
 60.8.16. 阿哲郡大佐町布瀬  
 シロスジトモエ  
 60.6.1.           #  
 ポクトウガ科  
 ゴマクポクトウ  
 59.8.24.       西大寺市奥矢津  
 ヒトリガ科  
 トラガ  
 58.5.4. 阿哲郡井倉〜方谷  
 クロフシヒトリ  
 60.6.       阿哲郡大佐町布瀬  
 ヨツボシホソバ  
 ?           #  
 ゴマダラベニコカゲ  
 60.7.       #  
 スジベニコケガ  
 59.6.29. 蒜 山  
 シロヒトリ  
 59.8.24.   岡山市竜の口  
 ヤママユガ科  
 ヤママユガ  
 54.10.       西大寺市西大寺  
 クスサン  
 58.9.18.       #  
 ヒメヤママユ  
 61.10.28. 阿哲郡大佐町布瀬  
 ウスタビガ  
 62.11.3       #  
 カノコガ科  
 キハダカノコ

59.6.20.   岡山市竜の口  
 スズメガ科  
 クロホウジヤク  
 55.10.8.   西大寺市西大寺  
 ホウジヤク  
 54.6.18.   西大寺市新橋  
 ヒメホウジヤク  
 58.10.     岡山大学  
 スカシバホウジヤク  
 61.5.14. 阿哲郡大佐町大佐山  
 ベニスズメ  
 ?       岡山大学  
 モモスズメ  
 60.6.17. 阿哲郡大佐町布瀬  
 ウンモンズズメ  
 60.8.29.       #  
 オオスカシバ  
 55.7.11. 西大寺市西大寺  
 コスズメ  
 55.9.13.       #  
 セスジズメ  
 55.8.20.   西大寺市西大寺  
 オオシモフリズメ  
 55.3.31.       #  
 クチバズズメ ? 岡山大学  
 トビイロスズメ  
 54.6.22. 西大寺市西大寺  
 エビガラスズメ  
 58.9.18.       #  
 キイロスズメ  
 ?       西大寺高校

## 備中広瀬蛾類採集品目録(2)

### 楨 本 精 二

日 時 V. 25.1964. 昼間 晴天  
 コース 勘場 - 笠根 - 勘場  
 記載例については備中広瀬蛾類採集品目録(1)  
 を参考されたい。丁度蛾の第1化の最盛期に当  
 ったらしく勘場から笠根迄の1 km足らずの上り坂  
 に4時間を要したが未だ可なりの数の採取もれが  
 あった。

1. ○カノコガ                   58 - 4  
 2.   ゴマダラキコケガ       60 - 21  
 3. ○ニセシロフコヤガ       91 - 2  
 4. ○シロフコヤガ            91 - 6  
 5. ○マダラエグリバ         101 - 1

6. ○カバフヒメクチバ       103 - 2  
 7. ○リンゴツマキリアツバ   103 - 13  
 8.   ウスグロアツバ         106 - 3  
 9.   キイロアツバ           106 - 4  
 10. シラナミアツバ          106 - 15  
 11. ミスジアツバ            106 - 22  
 12. ○ニフトコドクガ        116 - 6  
 13.   ヒトツメカギバ        121 - 18  
 14. ○マエキカギバ          122 - 10  
 15. ○ヒメハイイロカギバ   122 - 13  
       あまり多くない。  
 16. ○スジモンツバメアオヤク 125 - 5

17. コヨツメアオシヤク	126	-	26	33. フトフタオビエダシヤク	150	-	1
18. フトベニスジヒメシヤク	127	-	6	34. ツマトビキエダシヤク	156	-	6
19. マエキヒメシヤク	128	-	14	35. ○キエダシヤク	159	-	3
20. ○ヨツボシウスキヒメシヤク	128	-	24	36. クロホシフタオ	162	-	8
21. ○ゴマダラシロナミシヤク	131	-	7	37. ギンツバメ	162	-	14
22. ○ハコベナミシヤク	133	-	8	38. ○キスジホソマダラ	163	-	8
23. オオハガタナミシヤク	136	-	5	39. ウスグロノメイガ	169	-	25
24. ○セグロナミシヤク	138	-	26	40. ○シロヒトモンノメイガ	170	-	14
25. ○サザナミオビエダシヤク	141	-	5	41. ○クロズノメイガ	170	-	31
26. ハグルマエダシヤク	142	-	13	42. ○モンシロクロノメイガ	171	-	1
27. マルハグルマエダシヤク	142	-	15	43. クロスジキンノメイガ	171	-	9
28. ○クロハグルマエダシヤク	142	-	16	44. ○クワノメイガ	171	-	23
29. ウラキトガリエダシヤク	143	-	4	45. フキノメイガ	172	-	21
30. キシタエダシヤク	146	-	3	46. ○シロスジアツバ	106	-	26
31. ○ソトシロモンエダシヤク	147	-	2	47. ○ニセウンモンクチバ	100	-	8
32. ○ヨモギエダシヤク	149	-	7	48. ウンモンクチバ	100	-	9

近畿以西でとれるが、あまり多くない。

### 新産地報告委員会 新産地報告委員会 おとしぶみ 新産地報告委員会 新産地報告委員会

#### メスアカミドリシジミの新産地

ウラクロシジミと同じく、すでに道信順氏によって県内の所々に産することが確認されておりますが、6月28日千軒地区にてウラクロシジミを採集した同じ場所、多数の♂を採集しましたので報告します。

( 竹内幸夫 )

#### ウラクロシジミの新産地

本年6月21日苫田郡加茂町倉見地区で、溪谷西向斜面をとぶ本種多数を発見、足場が悪いため3♂のみ採集するに止めました。なお発生数は相当なものとは推定しましたが午前中は全く気がつかず午後3時過ぎころより活発な動きを見ることができました。

また6月28日奥津町千軒(旧羽出村)で同じような環境に発見、やゝ悪い足場も克服して多数を採集、更に附近の道路上にてきた1♀も得ることができました。以上はいずれもやゝ狭い範囲での発見ですが有力な産地として報告します。

( 竹内幸夫 )

#### 倉見てアカマダラセンチコネを採集

本年6月21日に倉見の林道上を飛びかけた本種を得ましたが、稀な種ではないかと思ひ報告しました。なお他に発見された方があればお知らせ下さい。( 竹内幸夫 )

#### 阿哲郡大佐町布瀬のサナエトンボ4種

*Tricampis melampus bifasciatus* フタスジサナエ. 1960.5. 1♀

*Davidius rarus* ダビドサナエ. 1961.6.15. 1♀

*Stylogomphus suzuki* オジロサナエ. 1960.6.18. 1♂

1961.6.15. 1♂

*Onychogomphus viridicoetus* オナガサナエ. 1960.7. 1♀

1961.6.15. 1♂

特に多産し燈火にもよく飛来する。

( 赤枝一弘 )

## 採集記 龍の口山系でトンボを追う II

(アオヤンマを採る) 赤枝一弘

5月17日、ベッコウ、ヨツボシ、の再確認と、アオヤンマの記録を目的として奥谷津の池へ向う。アオヤンマはかつては各地にかなり多かつた種で、私自身もかつて小学生のころ市内で採つた記憶がある。しかしその後全国的に産地は減少の一途をたどり、現在ではかなり稀な種となっている。従つて県下でもかつては採れていると思われるが、現在まで報告された記録は、国会、片山氏、博物の友、いずれにもない。この奥谷津の池は、ヨシではないが、ガマが生えしげり、やゝ小高い所にあり、ベッコウ、ヨツボシ、が居ることからも分るように、古い池でザリガニ等も進出してないようである。アオヤンマが生き残っているとすればまずこの池であるという気がする。

さて今日は一路奥谷津へ向う。林の入り口へバイクを投げて入って行く。道なりに祖架があつたのでふつてみたが、クモ類が多くたいして何もいない。ゾウの類とサビカミキリ類2種、キクスイモドカミキリだけであつた。さて池へついた。北側だけに水草が生えているので東側から北へ進んで行く。途中脱皮殻をさがすがあんがいみつからぬものである。一つだけオオヤマトンボと思われるものが草についていた。例のガマの群落へ出た。みるとヨツボシトンボは多い。ヨツボシとハラビロが優占種のようである。これではかつて博物の友で、鈴木氏が岡山市東方の池のいたるところにヨツボシが多いといっているのもうなずける。しかしすばやいので多いわりには採れない。かなり追つて2匹を採る。ヨツボシに比べベッコウは少く、ガマの中で1頭、附近の草むらで2頭目撃し、内1頭やつと採つた。さて残るアオヤンマであるが、ガマの中を飛ぶヤンマ類を注意してさがすが、いずれも、産卵中のギンヤンマ、クロスジギンヤンマの♀である。しかしさがしている内どうも一頭だけあやしい種がいる。注意してみようと思つても、たぐみにガマの中をぬつて飛びすぐに見失う。しかも時おり思い出したように高くとび、近くのブドウ畑上空に見えなくなる。1時間近く執着ように追いまわしたがついに採れなかつた。しかしヤヤ小型で背つぼく、腰がくびれておらず、ずん胴である所など明らかにアオヤンマの特徴である。思いは残つたがまた来ることもと思つて帰路についた。

当日の採集品

ベッコウトンボ1♂ ヨツボシトンボ2♂  
フタスジサナエ1♂1♀ オグマサナエ1♀  
アオヤンマ(?)目撃 脱皮殻(オオヤマトンボ)

5月31日、この前採りそこねたアオヤンマが気になり、再度奥谷津の池へ出かけた。この所、本家の竜の口山の方は御無沙汰になつた。こちらの方が山へ登らずにすむし、珍種も多いとなれば自然こちらへ足が向く。雑木林へつくとすでにウラナミアカシジミがかなり飛んでいた。本種も西大寺市周辺では竜の口山で1頭採つたのみであつたが、こゝにはかなり多いようである。4頭採つた。ウラゴマダラシジミは注意したが採れなかつた。例の池へついた。岸辺を一頭のかかなり大きなヤンマが飛んでいる。大きさからいえばオニヤンマのようであつたが、尾端附近に黄色い斑紋があるようにも見えた。かなり追つたがついに正体不明のまま逃がす。ヨツボシは依然多いようであるが、この前よりは減つていた。ベッコウはついに今日一日、一頭も見なかつた。これは元々ベッコウが少いのか、池より離れる性質が強いのか(おそらく両方であろうと思われる)であろう。他にコフキトンボがかなり発生していた。本種もかつては非常に多かつたが、現在ではかなり少くなつてゐる。さて池のまわりを3回まわつたがこの前見たアオヤンマらしきものの影さえなく、クロスジギンヤンマも居ない。脱皮殻を1個採つたのみでこれは前回のオオヤマトンボらしきものと同じである。

残念であるがいつたんあきらめ、この向うのかつてウラケンシジミを採つた林へ行こうと道を10メートルばかり行つたところ、突然草むらから飛び出したトンボがある。近くの草にとまつたのを見ると、まぎれもなく前回の種ではないか。あわててふせ、すぐ逃げぬよう手でおさえる。取り出してみると、はたしてアオヤンマである。正確な記録としては、おそらく県下初記録であろう。しかし、あまり池から離れぬという本種が前回1頭目撃、今回も1頭見たのみであることから、当所でも稀なものと思われる。本日の目標をはたしたので、一途帰路につく。これで今年の目標であつたヨツボシ、ベッコウ、アオヤンマを記録した。残るはキイロヤマトンボ、マダラニワトンボ、ということになりそうである。

この報文を書くにあつて、標本の同定他種々御教示いただいた林憲一氏に感謝いたします。

本日の採集品

アオヤンマ1♂ コフキトンボ1♀  
ウラナミアカシジミ メスグロヒヨワモン

## ドクトル・ザーメン採集回顧録(4)

一人形峠でウラン鉱ならぬムカシトンボを捕えるー  
ドクトル・ザーメン

今年の採集シーズンは好天に恵まれて、毎日曜日に重井院長の愛用トヨベツトクラウンデラックスは県下のどこかを走っている。和気地方を皮切りに、加茂賀陽地方、苦田地方、藤山、新庄など4月下旬以降主に県北に遠征してかなりの戦果をあげていたのであるが、ドクトル・ザーメンは未だ一度しか参加していなかった。観音竹の植え替えその他で多忙を極め、遂にそのチャンスをついに活用できずあたらしく肉の嘆をかこっていたのである。

5月30日の土曜日に、明日こそはと意気込んで昆虫館に出かけたのも、無理からぬことであろう。午後1時過ぎ颯爽とドアを開けたが一人も居ない。3時頃まで待ったが遂に一人も勇姿を現わさず、これでは翌日の計画どころではない、ドクトル・ザーメン早々に引き上げた。

というも、数日前にドクトルの帰宅と時を合わせてわが庭園に飛翔し来りしトンボ1匹あり、飛んで火に入る夏の虫とはこのこと直ちにひっ捕えてみるとトラフトンボ(♀)であった。わが浅原の地は好採集地として昨今脚光をあびつつあることでもあるし、珍種稀種いかに潜んでドクトルのお越しをお待ち申し上げて居られることでもあろう。御期待に副うべくこれから出かけようというわけである。

しかし、なかなかそうはいかなかつた。家事手伝勤務がドクトルの帰宅を待ちうけていたのであった。

かくなつては翌日曜日あるのみ。一人では心許ないので電話で重井院長の日曜日の予定をお伺いすると、まだ決めていないとのことである。思うに重井院長は4月このかた毎日曜日にどこかへ出かけて居られる。そのタフなことはただただ感嘆あるのみで、かつその御熱意には心服の至りである。ここまで徹底してやり通さなければ本物ではない。がこのあたりで一日ゆへくり休養なるのだろうか。また御令室、御令嬢、御令息への家庭サービスもおありのことだろう。この上は単独行と覚悟をきめる。

地図を拡げて計画を練るところへ、ドクトルの邸宅前に車のとまる音。愛犬が吠える。これはこれは坂本運転手のにこやかな笑顔であった。ドクトル・ザーメンの第六百感はピンと緊張した。しめた！明日はいっしょに行けるぞ。明朝六時出発、

行先湯郷方面との御宣託であった。連絡の方法がないので、わざわざお出下さったのであり、そのように御心遣い下さった重井院長の御厚意が身にしみて嬉しかった。(ドクトル・ザーメン宅、倉敷局22-6978番の電話がこのほど開設された。今後はどしどし御利用賜わりたく、まずは以上電話開設の御案内まで。敬具。ドクトル・ザーメン)

旅は道ずれ・車は坂本さんまかせ・重井院長と小生ドクトル・ザーメンと二人、シートにふんぞりかえって快適ドライブである。

この道はいつかきたみち

ああ そうだよ

事故防止の川柳の立札が立ってた

.....

新1級53号線をあとに、旧2級179号線をひた走り、富村を狙う。この村は山を大切にすることで、植樹など山林経営で村全体が裕福であるとの話である。深山幽谷を想像して箱より折れていよいよ山奥へと突入。坂本さんの運転なればこそ安心である。どんな狭い林道でも、車がさらに小さくなって走るのだから大した腕だ。何の心配もいらない。しかし崖崩れが多く、花崗岩の崩解した風化物が車の進行を妨げ、降りて偵察したがこれ以上はとでも進めそうにもない。残念ながら計画変更。直ちに後進することにする。それにしてもきれいな花崗岩の風化砂だ。この砂で観音竹を植えたらよく育つだろうと考えて見渡すとやゝ古びてはいるがバケツが一つ道端に用意してある。せつかくの御厚意、遠慮するのはかえって失礼というものである。いっばいに満ちして格好の土産物とする。思いは同じ、坂本さんもいっばいつみこんだ。

次いで奥津温泉をみながら山戸原より折れて三子原へと向かう。昨年夏に計画したが、台風の余波をうけて果さなかつた所である。タニウツギの花も満開でアサマイチモンジなども飛び交い、大漁疑いなし。11時をすぎていたが、ここでゆへくり昼食をひろげようなどとはもつてのほかだ。腹がへって戦のできない奴は弱卒のみで戦の道を知らぬ者の泣き言にすぎない。まずは勝ち戦の後に昼飯の味を楽まんものと直ちに昆虫どもとの一騎討ちに及ぶ。ビドニアの垣も忽ち網にかかり意気いよいよ高く、さらに奥へと入る。ところがで

ある。だんだん木がなくなり伐採の跡、山火事で焼けた跡などが見られるようになり、雲一つない炎天下に曝されることになった。勿論一匹の獲物も見つからない。相手がいなくてはそれこそ喧嘩にもならない。こんな筈ではなかった。谷の深さから考えても豊漁が予想されたが、こんなに山を荒らされては虫どもも立つ瀬がなかるう。大いにぼやきつつ引き返す。こんな所に長居は無用、適当な所まで降りて昼食にしようとして車で山を下りる。ぶつぶつ言いながらそれでも途中花の咲いている木をみつけて、念の為に一匹はゆすってみる。これはどうだろう、数十匹のビドニアが網の中で暴れ廻っているではないか。こんなことなら何も奥深く入ることはなかった。殺虫管に虫を入れるのももどかしい。一度ゆすつた木でもしばらくして再び網を入れると前と同じほどのビドニアが入ってくる。かくて嚇々の戦果をあげたのである。やはり不満は言ってみるものだ。叩けよ、さらば開かれん。

昼食、ビールの味もまた格別である。重井院長と戦略品を見せ合うとさすが院長は歴戦の勇士、ドクトルの数倍もの獲物である。

せつかくのことだ、もうすこし足をのばして人形峠とやらを見て行こうではないかということになり、さらに遠征する。全くすばらしい所だ。深山幽谷を思わせるすこし東寄りの所から谷にわけ入る。しかし、花は咲いているがさつぱり手応えがない。入るのはアサギマダラの幼虫ぐらいのもので、結局ウランの毒気にあたつて虫どもも寄りつかぬのかも知れない。またもやぼやきつつ、大いにぼやきつつ引き返すこととする。このとき、重井院長、葉の上に止まっているカミキリを発見、トウキョウウトラであつた。県下3番目の記録で御気謙麗しくわたらせ給うなり。坂本さんも目をぎょろぎょろさせて、とれてとれて困るほど、どの花にもビドニアが居るとのことである。坂本さんの網には入るが、ザーメン親分の網にどうして虫が入らないのだろう。全く不公平なことだと思はれながらゆすと、とうとうつきが廻つてきた。入るは入るは何回同じ所をゆすつても入るのである。とつとつとりまくる。

一服して原っぱに出ると、にわかに入虫を追って1匹のトンボが舞い上がった。かなり大きな虫であつたが忽ち捕えてさつと急降下してくる。非常に敏捷な動作である。ドクトル・ザーメン獲物はなくても常に3本つなぎ柄網を正眼にかまえたまま歩いているが、この急降下してくるトンボをみて振つた腕の冴え、タイミングのよさ、忽ちにして御用となつた。いくらじたばたもがいても網の

## Maddester

## 雑言録(1)

水野弘造

## 1. 音と虫

虫屋には不思議に音楽好きが多く大学時代に知合った虫友達は殆どクラシック愛好者ばかりであつた。ところが虫と音楽の傾向は平行するものでヘンデル、ブラームス、ショパン、バルトーク、ドビッシー etc. etc と何でも聞くような者は大抵蝶であれ蛾であれ、カミキリであれおよそ昆虫ならば何でも採る人間であるが、最高の作曲家はシューベルトだけだ、などという独善家に限つてゴミムシダマシしか集めなかつたり、バッハのレコードしか買わないような狂信者ならば美しくもない蛾ばかりの標本箱の中にうづもれてニタリニタリと一日悦に入っているといった傾向がある。さて私はと言えば最初尺八を練習して音楽に興味をおぼえ、モーツアルト、ベートーベン、ブラームスとおきまりのコースでクラシックになじみ、フラン

中だ。どうなるものでもない。慎重に手を入れて翅をつかむと、腹を曲げてその先の附着器でドクトルの手を突き刺そうとの構えである。オッとそんなことで驚くようなドクトルではない。誰が離すもんか。いやに頭の悪い田舎つべだ。このときフッと胸をかすめるものがあつた。そうだ、翅は前後翅おおむね等しく、三角室なく、まぎれもなくこれぞムカシトンボならんか。直ちに三角紙に収めたが、まだ腹を曲げて尻上げの恰好である。重井院長におみせすると、ムカシトンボに違いないとのことであつた。捕つた！ようやくにして捕つたのである。昭和39年度の最大の目的の一つをここにあつけなく果たし、もくもくと湧き上がってくる興奮をのせ、好採集地人形峠を後にしたのは、夕陽迫る黄昏時であつた。時期おくれのわらびの土産を大量に乘せて。

(昭和39.7.1 記)

## 〔追記〕

捕えたムカシトンボはるで、早速解剖に附した。しかし他のトンボと違っているのが精巢は簡単には見つからず、ドクトル・ザーメンを少々あわてさせた。折角の標本なので消化管なども一部固定、いづれセクションする。来年再び数個体に相まみえんと期待している。



クに共鳴し、現在ではブルックナーに定着してしまつた。虫の方は中学生頃は蝶、甲虫、トンボなどは勿論、アブ、ハチ、バッタはてはカゲロウ、シリヤゲムシなどに至るまでおおよそ目につく虫は全て箱の中に並べたものだが、雑虫、アブ、ハチ……と採らなくなり大学に入つた頃はおおよそ蝶甲虫、トンボのみとなつていた。それが倉敷昆虫館開設の案を重井氏より聞くに及んで感ずるところあつて甲虫のみの蒐集にコリ固まることになつた。と云つて事實は未だコリ固まり方が足らなくて虫の数はわずかだが何しろ一時の興奮のあまり「天牛を250種集めるまでは結婚しない」などと宣言したもので、おかげであつて41種のカミキリを集めるまではオヨメさんも貰えないわけである。41種のカミキリのうちいくらかでも御援助下さる方があればお礼にはブルックナーのレコードをお聞かせいたしたいと思つている。

## 2. 蝶と蛾

数年前クセジュ文庫から「蝶」という本が出たがその中に蝶と蛾の本質的な区別はないという意味の説明がある。専門的分類法ではいざ知らず、小学校理科教科書に書かれている蝶と蛾の区別法はまことにわれわれに便利である。私も未だに触角の先端の形で区別する方法しか知らないが、D君の南米での採集品の中の一つは完全な蝶の触角をもつ蛾であつた。採集したD君自身も蝶のつもりだつたらしいがゴマダラチウに似たその虫はまぎれもなく蛾の一種に分類されているそうである。こうなると蝶と蛾の区別法はかつてM君の云つた方法の方が素人目には余程確かである。すなわちM君によれば「蝶とは前翅と後翅の模様が連続するものであり、蛾とは前翅と後翅の模様が不連続のものである。」

私はこの説が非常に気に入つてMaddesta誌上に発表しようとした。といふのはこの分類法によればヤマユチ、ジャクガなどの多くの蛾は蝶であつてヤマユチウ、ジャクチウなどとなるため、数少ない蛾類学者の負担は軽減され、数多い蝶類愛好者の研究分野は拡大されるために日本の鱗翅目学会全体に大いなる貢献をすると思つたからである。ところが生物学者の卵であるM君(今は既に蛹くらいに生長している)は私の発表意図を感ずるや否や機先を制してその説の否なることをMaddesta誌上に先に発表してしまつた。どうやらこの説を発表されると自分の生物学者としての資格を疑われるとでも思つたものらしい。彼曰く、「私は水野君に蝶と蛾の相異点について一つの意見を出したことがある。つまり蝶の羽根の模様は前後翅共に大体共通して、殊に前翅の帯状の

縦の線は後翅に連なることが多い。これに反して蛾では前翅と後翅の模様は共通でなく色すら異なる場合が多いと話したのである。その例として蝶ではイシガケチウやアオスズメアブ、蛾ではヨトウや多くのメイガを見よなどと云つた。しかるにこれはとんでもない間違ひである。信じないで頂きたい。蛾の中のかかり多くのものが前翅後翅に共通した模様を有している。オオミズアオ、イボタガ、トモエガ、ジャクガの多数などはそうであり、セセリチウの中には前翅後翅の模様が共通でないものがある。しかるに水野君はどこをどう間違えたか徐々に蛾を蝶の群に入れ蝶を蛾の群の中に入れ始めた。ヤマユチウ、カノコチウ、ミヤマセセリモドキ、果てはトリバチウまで現われる始末。もとより彼は一度信じたら後に退かない。従つて彼が諸兄の標本を見てかくの如く云い始めたら気を悪くしないで頂きたい。皆私の責任である。云々”(Maddesta No.1 p.5参照)

## 3. 変な名の虫

虫の名前はまことに味わい深いもので私は近頃学名の持つ意味をラテン語辞典で調べることが楽しみにしている。私の高校時代の生物学の師である森田平三郎氏は日本人は生物の命名に特に優れている旨をヘクソカズラ、イヌノフグリ、カイロウドウケツなどを例として説明された。和名に傑作が多いのは事實であるが学名にも結構愉快なものがある。今迄私の見た中で最高の傑作は *Bonzius hypocrita* Lewisで和名もボウズナガクチキムシとなつている。Lewisの目に日本の僧侶がいかにか映じたかは明らかであり、又この虫と坊主の印象との結びつきなど推察すると興味つきない。私はこの名の所有者を永年求めているが未だにお目にかかれぬ。一体にこういう格恰のナガクチキムシは発見しても見かけに似合わず逃げ足すこぶる早く、体色と相まつてボウズの名を連想させるに充分である。Mimodes monstrous Reiter オバケオオズネスイムシもその虫の格恰を言い得て妙である。しかし同属のアナバケオオズネスイムシとなると何が化けているのかわからないし、ズバケオオズ、コバケオオズ、オオバケオオズなども何とも珍名ではある。monstrousには未だお目にかかれぬが、アナバケとコバケをD君の採集品の中から見つけ出したときは感激のあまり顕微鏡をのぞきこんで夜が白むまで時を忘れたものである。翌朝D君をつかまえて「オバケが出たぞ」と云つてキョトンとさせたことは今でも思い出話の種にされて困る。

和名も慎重につけないと妙なことになる。マダラカサハラハムシというのはカサハラという人名

## 目 次

○ 榎本精二：岡山県の蛾 (3) ヤママユガ科 Saturniidae .....	1
○ 榎本精二：方谷・井倉間蛾類採集品目録 .....	2
○ 赤枝一弘：県下で採集した蛾 .....	3
○ 榎本精二：備中広瀬蛾類採集品目録 (2) .....	4
\$\$\$ おとしぶみ \$\$\$	
○ 竹内幸夫：メスアカミドリシジミの新産地 .....	5
○ 竹内幸夫：ウラクロシジミの新産地 .....	5
○ 竹内幸夫：倉見でアカマダラセンチコガネを採集 .....	5
○ 赤枝一弘：阿哲郡大佐町布瀬のサナエトンボ4種 .....	5
\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$	
○ 赤枝一弘：竜の口山系でトンボを追う〔II〕(アオヤンマを目撃する) .....	6
○ ドクトル・サーメン：ドクトル・サーメン採集回顧録 (4)	
一人形峠でウラン鉱ならぬムカシトンボを捕える一 .....	7
○ 水野弘造：Maddester 雑言録 (1) .....	8

に由来しているに違いないが、マダラと来た後につけてあるのでどうも腹が皮膚病か何かをわづらっている状態を連想させてあまり清潔そうでない。北杜夫氏はウスバカゲロウを“薄馬鹿下郎”だと思こんでいた旨をその著書に書かれているが、小生も幼少の頃ケンキスイを“景色吸い”と思こんで随分変な日本語の用法だと勝手に不思議がついていたことがある。チビキスイとでもしておいてくれれば読み違えの心配などなかつたのである。少し話が別だが“歩行虫”と書いてオサムシと読むことから、馬鹿によく歩くことを“オサる”と

云ったりしたこともあった。

由緒あるラテン語を使った学名にナントカベニスというのが多いのも考えてみれば妙な話で、*Pseudopyrochroa atripennis* Lewis なども和名ではムネアカクロアカハネムシなどともつともらしい名であるが、ラテン語ではクロチンチンアカハネムシという意味にはかならない。たとえ採集品が雌であっても *atripennis* なのである。それでも、プセウドピュロクロア・アトリベニスなどとつぶやくといかにもおどそかに聞えるから学名とは便利なものである。

医 療 法 人

# 重 井 病 院

倉 敷 市 幸 町

TEL 代表 (22) 3655